

朝鮮半島核対立に関する六カ国協議国家首脳たちへ寄する公開書簡

日本国仏教僧 寺沢潤世

南無妙法蓮華經

親しき同胞に

一、はじめに

それぞれの尊い国々を率いる指導者としての責務に深く敬意を表しつつ、私達の共有する人類の文明を存続させ、その共通の未来への責任を共に分かち合う、この地球の同胞の住人として、あなた方への公開書簡をしたためています。

二、広島・長崎六〇周年に

あなたがこの書簡を目にされる時、人類史上初めて核攻撃にさらされた唯一の都市が、この運命の一九四五年八月六日と九日を追悼しています。今年には東洋では還暦にあたる六〇周年にあたります。

第二次大戦末期、二つの日本の都市の上に炸裂し、一瞬にして幾十万の市民を抹殺した核爆弾はあまりにも衝撃的で、恐るべきものだったため、以後今日にいたるも、どの政治指導者も三たびあえて核兵器を実際に使用することはありませんでした。

しかしながら、このおそるべき破壊力の故にこそ、核保有国は抑止力として核兵器を開発しつつ、今日地上における全核戦力の総破壊力は生きとしいけるものとわれわれ人類の歴史もろともすべていくたびも破壊するに足ります。

三、核兵器が使用されうる潜在的紛争地点はやがて国際的コントロールができなくなるほどに拡がるかもしれない

冷戦後、さらに9・11以降の世界は地政学上、安全保障のありようをまったく変えてしまったことを、私達はみな知っています。あたかも新世紀の「グレートゲーム」が鉄のカーテンの消滅したユーラシア大陸全域にわたって再演されているかのようです。これはポスト・サダムのイラクから朝鮮半島にいたり、ポスト・ミロシェビッチのバルカン半島からポスト・タリバンの南アジアにいたりします。この広大な全大陸にわたる空間は現存の先進国がこれらのエネルギーの大半を依存する戦略的生命線となりました。

私達はそこにこれまで不適切に処理されてきた多くの紛争が新たな国益や利権にからむ新しい危険を付け加えたのを目にしています。そこでは新たに独立した国々「見捨てられた国々」が大変むずかしい国家建設にたちむかい、あたりに目ざめた自己文化アイデンティティが外からの大国間パワーゲームとしばしば対立を生んでいます。

そこが今、急激に起こりつつある攻撃的な汎イスラム勢力によって新たな「グレートゲーム」を全地球的規模の文明間の衝突へと変貌させつつあるのを、あなたは目にしています。

インド・パキスタン双方が核相殺能力と運搬システムを共に獲得した今、衝突は核の撃ちあいにエスカレートし得ることを知るにいたりました。攻撃的イスラム主義者が選挙に勝ち議会を制したパキスタンでは核戦力が彼らの手にわたらないことを誰が保証できるでしょう。テロに対するグローバルな戦いにおいて、潜在的な脅威には先制第一撃も辞さないというかまえはかえって敵対国家や非国家武装勢力に核抑止力入手させ、攻撃を受ける前に核を使わせる方向に走らせかねません。誰がこのような状況に立ち至ることを想像したでしょう。核の発火地点は今にも国際的に有効なコントロールを越えて拡大しようとしています。

四、核軍縮の失敗

国連はこの六〇年の歴史において、核軍縮をその最優先任務としてきましたが、まったくの無能をさらけだしました。この主な理由は安保理常任理事国の五カ国が最近まで核兵器を独占し、核軍縮をできるだけすみやかに達成すべきとする彼らの負う義務をまったく反古にし、かえって世界政治の立役者として、核保有の立場を利用し、目先のマキャベリ的な打算の上に核のノウハウと武器関連技術を外交的取引材料として他の国に売り渡してきたからです。その結果二十一世紀に立ちいたった今、私達は核のテロの無法地帯にいる自分達を見つげ出す事になりかねません。

今の状況を説明するたとえばこうです。

北コーカサスで起こったベスランの学校のテロリスト占拠の悲劇的な結末を思い出しましょう。また、モスクワの劇場人質事件の、あのおぞましい暴挙について。彼らは無辜の市民を人質に使って一つの政治的目標を要求しようとしました。彼らはテロリストとして非難され、その行為は文明社会で許されない蛮行として攻撃されました。

核の軍事計画の論理にあなたはどんな違いを見つけることができるでしょうか。本質的にそれは、ある特定の国の核の恐怖のもとに社会全体、全国人民、ひいては全人類を人質にとるということではないでしょうか。

テロに対するグローバル戦争が今、世界中で計画され実戦準備がされていますが、そのふい打ちの先制第一撃は自国民および他の特定国の全国人民を常に核戦争の危機にさらしつづけています。たった今も全地球規模でこのような軍事体制準備が、ひとにぎりの政策決定者と戦争立案者によって、まったく一般国民の知るところなく極秘のうちに進行中です。

国民の生きる基本的権利、自己の未来を選択する基本的権利を国民から奪う権限を、誰が彼らに渡したのでしょうか。

どうして誰もこの合法性に疑問を呈しないのでしょうか。近代デモクラシーの根幹をなす柱は国の主権は国民に属すということです。核兵器はすでに国民から主権を奪い取っているのです。

ある核保有国にとって、その国の領内で国民が厳しい国家的弾圧にさらされていたり最悪の場合ジェノサイドにさらされている時、国際社会の監査、介入をふせぐ盾として、核のおどしが有効です。コソボ戦争、のような国際社会の人道的軍事介入はこうした場合第三次核世界大戦を意味しかねません。

まだ私の記憶に新しいこととして、エリツイン前ロシア大統領がチェチェンでの残酷な戦争への盛り上がる国際批判に直面して世界にロシアの核保有をちらつかせたことがあります。こうしたおどかしが北京においてソ連消滅後の最初の中口首脳会談中になされたことは、シンボリックです。

五、あやうい岐路に立つ北東アジア

親しい同胞、六カ国協議の首脳達に

今年も広島・長崎の原爆犠牲者を追悼する六〇周年の式典に、多くの人々が集まり平和を祈っている最中、一方ではあなた方は過去からひきついで解決の複雑な問題にとじこめられ、しかも新しい国際政治力学のかけひきの影の下にある、核危機に向かい合っています。時が

経るにつれ、この地域は着実に、予想不可能な対立に向かいつつあり、三たびこの地域に核兵器が使用されかねないところに来ています。

平和裏にこの危機を解決することが誰にとっても最大の利益ではありますが、これをどう達成するかによって、これからの北東アジアの安定をどう形成するかが決定し、ひいては来る十年の世界政治力学の方向を定めることとなります。

しかし現在の雰囲気はまったく生産的ではありません。深い疑いと挑発と非難の投げ合いです。地域全体のこれからの平和と繁栄について共通の新しいビジョンを追及する姿勢がまったく欠けています。

進行中の政治的雰囲気は、トータルでは世界の他のどの地域もたちうちできない経済力を持った北東アジアの近隣国の間にさらなる軍拡競争を引き起こし、せまいナショナリズム、ライバル、敵対のあらたな形態を生じさせる方向に向かっています。

疑いなく、北東アジアにおいて私達はあやうい岐路にさしかかっています。ひよっとすれば過去六〇年のうち最大の後戻りのきかない危険な地点かもしれません。

しかし不幸なことには事態の核心が政治的動機に基づいたプロパガンダと疑心暗鬼の膨大な煙幕によって覆われていることです。

例をとると、北朝鮮が日本の領空を通り抜けてミサイル試射をしたことは平和時における疑いもない挑発的な敵対行為です。これは中国の潜水艦が日本の領海深くに侵入した事件についても同様です。両方の事件で事前の通報もなければ事後の納得のいく説明も謝罪もありません。これは現行の日米安全保障条約のとりきめにおいていったい何を意味することなのでしょう。

私達はつい最近、日本の小泉首相が憲法の政教分離を公然と無視して、靖国神社の公式参拝を強行するというまったく思慮のないふるまいで外交上大騒ぎになったことを目にしたところです。靖国神社は国家の強制した愛国主義、日本民族の神国化、日本軍のアジア進出拡大の栄光化を進めた思想の総本山の聖域でした。

この思想こそ日本を悲惨なまでに誤らせ、この結果としてアジアに未曾有の破局をもたらしました。当然日本政治のリーダーシップがこうした本末転倒の行動をとることで、日本の戦争時の残虐な過去に対する反日感情の激しいゆり戻しを引き起こしました。

中国、韓国のリーダーは間髪を入れずこのさわぎを外交舞台のスポットライトの上に引き上げて、国内に広まる民間反日感情をあおりました。彼らの側でも、合憲性、信教の自由、良心の自由、政治表現の自由にかかわる日本国内の論議に干渉することで、思慮の欠けた役割を演じました。国家の指導者としては、他の主権国家の内政問題に干渉しないという国際

関係の慣例を無視したことになります。

実際あなたのとった行動は日本にどんな結果をもたらしたでしょうか。あなたは、日本の強力な主流政治勢力に現行日本平和憲法を永久に葬り去る恰好の口実を与えました。あなたは本当にそうなることを願っていたのでしょうか。あなたが靖国神社と、それが代表する軍国主義日本の過去を憎まれるのは当然でしょう。しかし残念ではありませんが、中国では今中華愛国主義と国家の誇りの強化につとめ、しばしばそれが他民族への憎悪と自国のモラルと文化の優越感によって増幅されていますが、それは、かつて日本の軍国主義者が靖国の思想によってつくりあげたものにきわめて似ているように思われることが残念です。

六、過去三十五年間の私の世界平和行脚のはじまり

親しい同胞に

私達は二つの危険な分水嶺にあることに気づきます。その二つはリンクしています。ひとつはこの六カ国協議が失敗に終わり、ただちに北東アジアが核の本番に追いやられることです。もうひとつは、日本国平和憲法の終わりです。

日本に生まれ育ち、広島長崎の原爆投下によって歴史上かつて見たこともない、考えも及ばぬ残酷な方法で殺された幾十万の普通の人々の、平和に毎日続いていた生活が一瞬にして消え去ったことを始めて知ったときは、おそれと衝撃にうちのめされました。普通の人々にどうしてこのような想像を絶する苦難がもたらされたのか、誰にそんなことができよう、どうして起こったのか。

私の父は大戦後、若い徴兵として南方の前線から生還し、家族をもうけました。最近亡くなるまで一生、普通の世俗的生活に関心を示さず、戦争体験の時からかかえる疑問への真実の答えを求めつづけました。

そうした疑問にかられて、私は十九歳に日本山妙法寺僧団の伝説的平和主義者かつ偉大な仏教の師匠である藤井日達聖人の弟子となりました。

「あの平和のお坊さん」とニックネームをつけられ、冷戦の最高潮時の分断された欧州をまたがる数知れない平和行進やデモ行進を先導しました。私達は世界中に巻き起こる何百万の人々の波に合流しつつ、生きた答えを実現しはじめました。あらゆる差異と壁を越えて何百万人の人々と共有する全地球的一体性。平和のためのひとつの人類愛という新たに目ざめ得た真実。私達は共に滅びるかわりに、共に生きる事を単純に選択したのです。

この新しい真実こそ、核の共滅に代わる唯一の道であることが証明されたのです。

私達はこの真実が壁を取り払い、人々を核の影のもとで引き離していた虚妄の考えを追い払うのを目にしました。

精神と霊性の覚醒というかつてみたこともない平和の波を背景に、あらゆる場所で祈り平和の鼓を撃ちました。それはレーガン・ゴルバチョフの第一回ジュネーブサミットからモスクワ・クレムリンサミットへ、砂漠の嵐作戦中のサウジ／イラクの国境から、一九九一年夏モスクワ・クーデターの最中の非暴力のバリケードへ、チェチェン・ロシア兵士の母親達と共にグロズヌイへの平和行進からウクライナ・オレンジ革命中の何百万の民族の集まった独立広場へ、ベツレヘムの封鎖されたキリスト生誕教会から核戦争寸前のインド亜大陸へ、そして開戦直前、最後の戦争回避へ向けた宗教者平和アピールをサダムフセイン大統領へわたすはずであったバクダットへと続きました。

何十年におよぶ私の平和行動の間中、若き日のひとつの忘れ得ない体験が、心中深くこだまのひびきのように残り、終わらなき平和の巡礼を突き動かしつづけました。それは老いた核被爆生存者との直接の出会いです。静かにあの日の地獄の苦しみを話されたのですが、その声は全人類への深い慈悲と、自らが体験した核の終末から未来の世界が救われるようにという祈りに満ちていました。

七、核の黙示録から生まれた懺悔と新たな誓い

親しい同胞に

一九四五年八月六日の六〇周年に、人間としてのあなたの心を開いて彼ら被爆者の声に耳を傾けていると想像してみてくださいませんか。どうか今、多くの人々といっしょに、広島平和公園の中心にある平和のモニュメントの前に立っていると想像してみてください。あなたの前に小さな石の碑が建っているのを見つけてみましょう。いくつかの言葉が刻まれています。わたしも、よくこの地点に立ち、その意味について瞑想をしました。そこにはこうあります。

やすらかに眠ってください

あやまちはくりかえしません。

このあまりにも簡潔な改悔と誓いこそ、人類史始まって以来の核の黙示録から生まれた出た表現なのです。

もし人類が核の全滅によって消滅することがないのであれば、それは生き続け、全人類と

共に分かち合われつづけなければなりません。日本は国として自らおかした過ちから目ざめました。そしてこの最も簡潔な悔悟と誓いを、新しい日本国平和憲法にまつりこめました。それは国の主権は国民に存することを宣言し、全世界の人々の平和生存権（平和に生きる権利）は国家主権を越え、最も尊ばれることを認めました。それゆえに日本は決して戦争をせず決して軍隊を保持することはありません。

六〇年後の今、未曾有の国家的悲劇から生まれたこの最も尊い誓いは忘却の淵にあります。

八、近代アジアの悲劇から共通の平和というあらたなビジョンに向けて

近代アジア史に悲劇をもたらしたもうひとつ重要な過ちがあります。再びそれが繰り返されないためには、それが表明されなければなりません。

アジア近代化はその過程の正にその始まりから、これはアジアに脅威をもたらしつつある西洋列強の存在に対抗する目的で進められ、その近代国民国家造りは自己中心的なナショナリズムの上に築かれ、古くからのアジア文明形成期で共有された精神的靈的遺産の貴重ななかりは無視されました。普遍的靈性と平和のためのアジア古来の叡智は、軍事力によって国益を追求するだけの近代国家官僚によってナショナリズムとミリタリズムにとって代わられました。近代日本が、ひとたび西洋列強との残酷な地政力学上の勢力対決の闘争として、朝鮮半島、台湾、中国大陸から、アジア近隣へと進出を始めたその決定的瞬間から、究極の破局敗亡はすでに定められていました。

ここに余り知られることのない、マハトマ・ガンディーと、私の尊師である藤井日達聖人に関する歴史的なエピソードをお伝えします。すでに日本軍が中国への全面攻勢を展開しつつある時期、師はインドにあり、しばしば当時大英帝国からのインド独立の非暴力闘争を率いていたマハトマ・ガンディーのワルダの塾に住んでいました。ガンディーはアジアの偉大な隣国同士の戦争に深く憂慮し、中国での日本の軍事行動をヨーロッパ植民地主義同様に非難していました。ガンディーは、日本の中国における軍事行動は、アジアを英国の植民地支配から解放することを意図するためであるという、師の苦しい言い訳を認めませんでした。

（師も日本の大陸への軍事侵略を早くから抗議し、この結果必ず直面する国家敗亡を警告していました）藤井上人が大戦争に突入しつつある極東に帰還すると決めた時、カンデーは師の帰国の使命に中国と日本人の間の精神的絆を回復し、二国の和解の基盤を準備すべきだと語りました。年が過ぎインド独立、中国革命の後、マハトマ・ガンディーはすでに世に亡く、中国とインドは国境紛争で軍事衝突をしました。藤井上人は即座にインドと中国を

訪れ、インド首相ネルーと中国首相周恩来におおのの立場を再考するよう訴え、師と師の全弟子集団を紛争地帯に送り軍事衝突を回避するようお願いしました。

ガンディーは何世紀にもわたってつちかわれた平和の精神的共通遺産によって共に結ばれた偉大なアジア大陸に期待を寄せていました。そのビジョンは藤井聖人の行動にそのまま継承され、今日まで私達の確信となって生き続けています。

九、平和への新たな提言と目標

親しい同胞に

個人的に過ぎる想いに多くの時間を割きすぎた事をお許しください。しかし今こそ広島と長崎から生まれた改悟と誓い。そして平和の精神文明によって結ばれたアジア共同体というガンディーのヴィジョン以上に大切なことはないかと確信するからです。

北東アジアが迫りつつある核の危機から平和のうちに解たれ、この地域が二つの危険な分水嶺を越すことなく、近代アジアの悲劇の破局的な過ちをくりかえさないために、ここにあなたと、憂慮をするすべての人々に次のような平和の提言と段階を採用してください。訴えます。

*六カ国協議とそれに代わりうる代案

これまでの六カ国協議は予測不能な核問題対立に外交努力による解決を得るための唯一存在するチャンネルでした。しかしながら、この交渉の構成土台そのものに厳しい限界があり、中身のある解決をもたらすことは期待できません。それは、構成国のすべてにそれぞれ独自の相対立する軍事、戦略、経済的な思惑があるからです。その上、妥協するにはあまりに多くの構成国間における敵対関係が交錯しています。

1. ですからもつと広範で前向きな常設地域安全保障のフォーラムが、現存するAPECの枠組みの一部として探求することが望まれます。APECの全参加国が、あらたに北朝鮮を正式加盟に加えて、永久不戦条約を締結した上で、総合的な地域平和安全保障のための常設機構を提供する新たな責任を担うべきです（アジア太平洋安全保障条約／APPST）
2. 本年十月の釜山APECサミットで、APECがこうした役割を担うべき

かを検討する機会が加えられるべきです。それを目的に北朝鮮代表を招き、双方の納得した参加資格が与えられるべきです。

3. そうした新しいA P P S T条約の枠組みには、核保有加盟国は、他の全加盟国に対して全域において核兵器は絶対に使用されないとする安全保障を確約する条項が含まれています。全域にあるすべての外国軍事基地から全核戦力が撤去され、A P P S T海域においてすべての海上戦力、潜水艦核戦力が配備されることはないとする項も加えられるべきです。

4. A P P S Tには、地域のいかなる紛争地にも出て紛争防止、解決、調停する任務を付与された文民、武官で構成された紛争予防・解決の常設機構が設立されます。

5. 釜山A P E Cサミットにおいて北朝鮮への人道緊急援助計画、エネルギーとインフラ再建計画を採択して北朝鮮が核拡散防止条約の枠組みに復帰する決定をしたならばすぐ実行にうつされるべきです。

*グローバル核軍縮

1. 国連安保理の五つの常任理事国は安保理決議によって緊急核軍縮特別セッションを開催し、そのセッションで核兵器使用は人類への犯罪とする宣言を採択し、時間的枠組みに義務付けられた核軍縮プロセスを討議・採択することを確約すべきです。

2. 他の安保理の非常任理事国は常任理事国がその決定をなすまで安保理をボイコットします。

3. A P E C加盟国、その他の協調グループ国も、五常任理事国がこうした決定をなすまで、国連予算支払いを拒否します。

4. 国連事務局、その関係機関のすべての職員は、五常任理事国がこうした決定をなすまで、一日職務をボイコットします。

5. 以上の行動計画を実現することを目的とする世界中の民間キャンペーンを
広島・長崎六〇周年から発足させます。

*共通のアジアとその新しい平和文明への新ビジョン

近代アジアの悲劇の過去を克服するために、民間のあらゆるレベルでのイニシアチブが奨励されねばなりません。それがインスピレーションの源泉となり、アジアのひとつとの間の再接触と和解の促進され新しい平和の文明によるアジア共同の家を創造するようにします。

1. 今年、韓国の釜山APECサミットを発足点として、和解と新たな平和への誓いのための汎アジア巡礼が準備されるように提唱します。この汎アジア巡礼は中国、北朝鮮、韓国、ロシア、日本を巡ります。各関連諸国政府にはこうした平和行動が実現可能となるよう、できるかぎりの支援を要請します。

2. アジアの平和の精神的共通遺産を通じた歴史的絆を回復するため、ピースパゴタを汎アジアの平和と和解の合同プロジェクトとして歴史的意義のある地に建立しましょう。それはインドのアショカ王が自ら戦争を改悔し、新たな平和の誓いのために建立したかつての平和の歴史に学ぶものです。そうしたピースパゴタは文化、宗教、文明を異にする人たちの間の和解と協調を促進する場となりましょう。まず最初のピースパゴタプロジェクトとして、西安郊外の古い草堂寺で羅什三蔵が法華経の漢訳を完成して千六百年となる明年を記念してはじめられるよう提案します。

羅什三蔵はそこで多数の重要な仏教經典の漢訳をなしました。その偉業はインド・中央アジア中国の文明の相互交流の輝かしい好例で、また極東アジアの精神文明形成に大きな影響を与えました。

二つ目のピースパゴタは北朝鮮の金剛山に朝鮮半島の和解と平和再統一へのシンボルとして始められることができます。

3. アジアの歴史学者は近代アジアの戦争の歴史の客観的理解に達するプロジェクトをはじめ、この成果が次の世代に伝えられることとなります。こうして過去の過ちから学び、特定国の悪行を責め批判するだけであってはなりません。歴史教育は自国の出来事だけを強調するのではなくて、アジア中の異なった国々との豊かな交流、交歓にも光を当てるようにしましょう。それは次の世代がアジアの美しく創造的な共通の歴史を学ぶことを助けてくれます。

4. 各国の人々が積極的に未来志向の態度が養われるよう、戦争の記念碑、戦争のミュージアム、過去の戦争のテーマとする文化プログラムだけではな

く、協力と友好の創造的なうるわしい歴史を語り継ぐ努力をつとめましよう。

十、まとめ

親しい同胞と六カ国協議の首脳、そしてあらゆる平和のための友人達に

六〇年前の核時代の始まりに思いをいたすこの歴史的時点にあつて、私の想いとビジョンを分かち合ってくださいましたことを皆様に感謝します。未来の歴史家は私達の今の行動をどう評価することでしょう。私たちの前には多くの可能性があります。私たちの未来への努力を完全に果たすための深い思慮の間を待ちましょう。

ひとりひとりの心にひそむ聖なる本然への想いが目ざめ、私たちすべてを結びあわせ、自他共々宇宙本然の無限の慈悲心そのままの命と共にいきえんことを。

希望とともに

日本山妙法寺 ロシア・ウクライナ・中央アジアの教師

北東アジア仏教合同平和イニシアチブ提唱者

寺沢潤世

二〇〇五年七月三十一日 ウクライナ・キエフにて

Contacts:

E-mail: myohoji@land.ru

Mobile: +380-50-5311548

Tel/fax in Kiev: +380-44-4435553

Postal address: IPB, rue de Zurich 41, 1201 Geneva, Switzerland.